

# 『簠簋内伝』の宗教世界

谷口勝紀

## 〔抄録〕

『簠簋内伝』は「宣明暦」の注釈書として編纂され、中世における陰陽道の重要なテキストとされてきた。しかし、これまでその内容について深く論じられることはなく、巻一に牛頭天王縁起が収録されていることから、祇園社を中心とした牛頭天王信仰の側からの論考が主であった。

そこで、本書が暦注の書であることから、その暦注の部分に

改めて注目し、『簠簋内伝』の牛頭天王縁起を祇園社の由来譚としてではなく、暦注の典拠として読み解いていき、そこからこれまで触れられる事のなかった『簠簋内伝』の宗教世界に迫ってきたい。

キーワード 陰陽道、『簠簋内伝』、牛頭天王、暦注、祇園社

## はじめに

中世以降の民間社会において陰陽道のテキストとして最も流布したといわれるのが本稿で扱う『三國相伝陰陽輶轄簠簋内伝金烏玉兔集』<sup>(1)</sup>（以下『簠簋内伝』とする）である。しかし、これまで先行研究においてその重要性が指摘されてきたにも関わらず、本書についてはその成立も含めて未だに解決していない問題が多々残されている。

『簠簋内伝』の先行研究に関しては、西田長男氏<sup>(2)</sup>、村山修一氏<sup>(3)</sup>、中

村璋八氏<sup>(4)</sup>などをはじめ幾つかのものが挙げられる<sup>(5)</sup>。その研究の目的は、これまで主としてその成立を明らかにすることにあつたといえよう。

しかしながら『簠簋内伝』の成立については、鎌倉末期から室町初期頃に、祇園社と関わりのあつた人物によつて編纂されたと推定されるのみであり、『簠簋内伝』の成立に関する研究は、新たな資料の発見がないかぎり、完全に行き詰つているといつていいだろう。

『簠簋内伝』の今後の研究の方向性について、林淳氏は、書誌学的情報の充実、暦注解説書としての『簠簋内伝』の位置づけ、『簠簋抄』

との関係の考察の三点を示している。<sup>(6)</sup>

特にここで注目したいのは、林淳氏の第二の指摘であり、氏は「室町時代の暦注解説書のなかで『簠簋内伝』を位置づけることは必要である。従来はともすれば牛頭天王縁起に目が奪われすぎ、暦注部分への関心は不足していたと思われる」と述べている。

林氏の指摘通り、『簠簋内伝』については、卷一に牛頭天王縁起が収められていることから、「行疫神」である牛頭天王を祭神としていた祇園社との関係で論じられる事が多かった。

しかしながら、ここに注目すべき資料がある。平田篤胤の『牛頭天王暦神弁』というテキストである。<sup>(7)</sup>西田氏がその論稿のなかで触れているが、『牛頭天王暦神弁』には、『簠簋内伝』において牛頭天王とその眷属が「暦神」として配され、そこに記される年中行事などは皆、この「暦神」を「法例」としている、と記されている。つまり篤胤は、一般的な疫神としての牛頭天王ではなく、『簠簋内伝』における「暦神」としての牛頭天王の性格について述べているのである。

この篤胤の考察は、『簠簋内伝』卷一における牛頭天王縁起と暦注部分の関係を端的に表しているものであり、それは先述した林氏の指摘とも合致してくるのである。

そこで本稿では『簠簋内伝』において、「暦神」としての牛頭天王がどのように語られているのか、ということを中心に見ていき、そこから『簠簋内伝』卷一に内包される牛頭天王縁起の宗教世界に迫っていきたい。

## 一、暦注書としての『簠簋内伝』の位置づけ

まず、『簠簋内伝』は全五巻から成っているが、その巻一の巻末には「三國相傳宣明暦經註第一終」とあり、巻二以下にも同じように記されている。このことから、『簠簋内伝』が当時施行されていた宣明暦に基づく暦法の注釈書として編纂された事がわかる。<sup>(8)</sup>

先にも述べたように、『簠簋内伝』を暦注書として捉え、暦注書の系譜の中でどのような位置にあるのか、ということに関しては、これまであまり注目される事がなかった。

そこで、賀茂・安倍家の暦注書と比較し、その暦注書としての『簠簋内伝』がどのような位置づけにあったのか考察していきたい。

『簠簋内伝』の巻一から巻五まで記されている暦注の項目は、多岐に渡るが、その暦注の項目自体は、他の暦注書と一致するものは少なくない。

そのことは、中村氏が安倍家の暦注書である『陰陽略書』(十二世紀前後、成立)の本文校訂の際に、『簠簋内伝』をはじめ、他の暦注書を用いて校訂をしていることを、その頭註に示していることから窺える。<sup>(10)</sup>

中村氏が示した『陰陽略書』の注をみると、その本文校訂の際、『簠簋内伝』は二十九箇所用いられている。

また賀茂家に伝わる『陰陽雜書』(賀茂家栄撰、十二世紀)や『吉日考秘伝』(賀茂在盛撰、一四五八年)『暦林問答集』(賀茂在方編、一四一四年)などの項目にも『簠簋内伝』と共通するものが多い。<sup>(11)</sup>

「歳徳神方」「三宝吉日」など、方位や日次の吉凶及び禁忌に関する記述は、それぞれのテキストによって異同は見られるものの、基本的にその書式の体裁は大きな違いはない。

つまり、『簠簋内伝』の暦注部分に挙げられている項目は、基本的には、安倍家や賀茂家といった宮廷の陰陽家が用いていた暦注の吉凶・禁忌の内容を受け継いでいるといえよう。

中村氏は、『簠簋内伝』が安倍晴明に仮託されていることから、安倍家の系譜に連なるテキストと位置づけていると思われる<sup>(12)</sup>、少なくとも、これまでの先行研究を見ても、『簠簋内伝』が賀茂・安倍家の暦注書との接点があることは、否定し得ないところである<sup>(13)</sup>。

ただ、『簠簋内伝』の暦注の項目のなかで、先行研究においてよく取り上げられるものに金神の禁忌がある。金神の禁忌は院政期に唱えられ、それ以降に広く流布し、最も恐れられたものの一つである。

金井（現門田）徳子氏が、『簠簋内伝』と中世から近世にかけての暦注書に記された金神の説を比較している<sup>(14)</sup>。金井氏は、「江戸時代に暦書として権威のあった『循環暦』によると江戸時代の具注は主として『簠簋』に準拠し、『拾介抄』がこれにつぐものであったらしい。しかし金神の遊行に関しては、『簠簋』の説より、『拾介抄』の説が、貞享暦に取り上げられた」としている。

これは、『簠簋内伝』の金神の説が、貞享暦作成に関わった幕府天文方や土御門家には受け入れられなかったということであろう。

しかし、渡邊敏夫氏は、金神の説について、「京暦」「南都暦」「三島暦」などの仮名暦に、『簠簋内伝』の説が採用されていると指摘し

ている<sup>(15)</sup>。これらの地方の仮名暦は、それぞれの地域において権門寺社のもとについていた民間の暦師が発行していたものとされる<sup>(16)</sup>。

つまり、江戸幕府や宮廷の暦家たちには受け入れられなかった『簠簋内伝』の金神の説は、むしろ民間の側に受容されたということであろう。

金井氏と渡邊氏の指摘から窺えるのは、『簠簋内伝』が室町時代以降、近世においては権威ある暦注書として民間に広く認知されていたという事であり、一方でこうした『簠簋内伝』の金神の説に関しては、賀茂・安倍家の暦注書の記述とは全く違うものとなっている事は特筆すべきであろう。

以上のことをまとめると、『簠簋内伝』は、賀茂・安倍家による宮廷の側の暦注書と接点を持ちつつも、その流布主体は民間にあったということである。つまり、『簠簋内伝』は室町時代の暦注書の系譜の中で、賀茂・安倍という宮廷の暦注書と、近世以降に盛んとなった民間の暦注書の中間的な、いわば橋渡しの役割を果たしていた、と位置づけられるのではないだろうか。

この『簠簋内伝』の特色が顕著に現れているのが、暦注の典拠を冒頭の牛頭天王縁起に求めているところである。賀茂家や安倍家の暦注書には、その典拠となる文献が幾つか示されている。例えば『陰陽略書』には、『暦例』『百忌暦』などの書名が見え、また安倍晴明や賀茂保憲などをはじめとする陰陽道の先人達の説が引用されている。従来<sup>(17)</sup>の宮廷の陰陽道においては、暦注や祭祀などの典拠が重要視されていたのである。

それに対して、『簠簋内伝』ではそうした典拠となる文献の書名は見当たらない。これは、『簠簋内伝』が賀茂・安倍家と接点を持ちつつも、異なる系譜にあるものといえるだろう。

そこで次に、『簠簋内伝』巻一の暦注部分について、冒頭の牛頭天王縁起との繋がりをみていきたい。

## 二、『簠簋内伝』における暦神としての牛頭天王

『簠簋内伝』巻一には、牛頭天王縁起とそれに関連付けられた暦注が記されている。

では、この暦注部分において牛頭天王とその眷属たちが、どのように「暦神」として位置づけられているのかを見ていきたい。

『簠簋内伝』巻一の暦注部分をみると、「一、天道神方」、「二、歳徳神方」、「三、八將神方」、「四、天徳神方」、「五、金神七殺方」など、「暦神」たちが座する方位についての吉凶・禁忌が記されている。これらの記述について順を追ってみたい。

### 「天道神方」

まず暦注の項目は「一、天道神方」から始まる。まず、一年間の月毎の天道神の居る方位を示し、その後

右天道神者、牛頭天王也。萬事大吉。向此方藏袍衣、鞍置始、一切所求成就所也。

と注釈が記されている。

この「右天道神……」の記述が、『簠簋内伝』独自の解釈がなされている部分である。そこには、天道神は牛頭天王であり、何をするにしても大吉で、この方角に向って、袍衣納めや鞍置始めを行なえば、一切の望みが成就すると記されている。

ここに袍衣納め、鞍置始めという風習が登場している。この吉方に袍衣（袍衣）を埋めるというのは、袍衣を埋める方角によってその人の一生の運勢が決まるという信仰に由来し、全国的に広まった風習である。

とくに袍衣納めという儀礼について、『陰陽雜書』『陰陽略書』にも記載されているのを見ると、『陰陽雜書』「第五、産雜事」には、「藏袍衣吉日」の項目があり、「吉方、天徳、月徳、天道之方吉。」と袍衣を埋めるのに、天徳・月徳・天道などの暦神がいる方位が吉となっている。

『陰陽略書』「藏袍衣」の項目には、月毎の天徳神の方位を示したあと、「已上天徳件、藏袍衣、必埋天徳方也。若当禁忌埋天道也。又月徳・空方、吉。」とあって、袍衣を納めるときは必ず天徳神の方位に埋めなければならないとし、もしその方位が何らかの禁忌に当たっていたら、天道の方位に埋めるようにとある。このことから袍衣納めが、『簠簋内伝』以前からの風習であったことがわかる。

両書の記述をみると、基本的に袍衣を埋める方位は天徳神となつており、あるが、天道神の方位もまたそれに次ぐものとして位置づけられている。『簠簋内伝』の袍衣納めの記述も、こうした暦注の説の流れを汲んでいるということであろう。

ここで注目すべきは、この天道神が即ち牛頭天王であり、全てに大吉という万能の存在としている点である。この暦注部分の「一切所求成就所也」という記述などは、冒頭の牛頭天王縁起の中で、「信可信、牛頭天王八王子等」と牛頭天王への信仰を強く説いている点ともリンクするといえるだろう。つまり、天道神は牛頭天王と結び付けられることで、『簠簋内伝』における暦神のなかで最も重要な存在となったのである。

### 「歳徳神方」

次に、「二、歳徳神方」の項であるが、この神は「暦注諸神」<sup>(18)</sup>のなかでも最もよく知られているものである。

まず、甲己、乙庚、戊癸、丙辛、丁癸にあたる年の歳徳神の方位を記している。続いて、

右此方者、頗梨采女方也。八將神之母也。容顔美麗、忍辱慈悲之體也。故尤諸事可用之也。

とある。

『簠簋内伝』の注釈によれば、この方は頗梨采女の方であり、八將神の母である。美しい顔立ちで、忍辱慈悲の体をなしている。故に、諸事につけてこの方を用いるべきであるとしている。

この暦注部分では、歳徳神が牛頭天王の妃である頗梨采女と結び付けられている。

この歳徳神は、一年の福德を司る神であり、いかなる凶神も犯すことのできない神とされる。当然、先に挙げた『陰陽略書』などを始め

とする暦注書にも頻繁に歳徳神の名が見え、暦の世界において重要視されていたことがわかる。たとえば、『陰陽略書』本文をみると、歳徳及合庶事、修造用之。歳徳之所在、万福在焉。とあって、歳徳神の居る方位には万福あるという内容である。

さらに『暦林問答集』「釋歳徳第七」の項目には、

五行書云、凡陰陽用事、遇徳為善、故歳徳之方一年間、有徳之方也。

とあり、歳徳神の方位は有徳の方角であると、両書ともに歳徳神を吉方の神としている。歳徳神は暦の世界では、何事につけて縁起の良い方角とされていたことがわかる。

『簠簋内伝』の暦注部分に話を戻そう。

歳徳神の方位が、諸事に用いるべき方位であるとしていることは、このように暦注の世界では一般的なものである。『簠簋内伝』では、その方位が頗梨采女の方位であり、続けて「容顔美麗、忍辱慈悲之體也。」と記されている。

これは冒頭の牛頭天王縁起で、頗梨采女について「容顔美麗、无天下并」とその容貌について説明しているところとリンクしているのだろう。

ここでは、歳徳神が諸事に用いるべき吉方の神であるのは、牛頭天王の妃であり、「忍辱慈悲之體」を有する頗梨采女と同体であるからということが、強調されていると言えよう。

### 「八將神方」

つぎに、「三、八將神方」である。大歳神以下八將神の年毎の方位を記し、続いて

右八將神者、牛頭天王之王子也。而春夏秋冬四土用行疫神也。大歳神方者、厭歳其方也。以此一神方、諸餘七神方可知之者也。とある。

さらに、八將神の本地とその方位に関する吉凶をそれぞれ記している。

ここに登場する八將神とは、大歳神・大將軍・大陰神・歳刑神・歳破神・歳殺神・黄旛神・豹尾神のことで、『簠簋内伝』では牛頭天王の王子とされている。また冒頭の縁起中には八王子と称され、牛頭天王と共に疫神として暴れまわっている。

八將神は、もとは天体の五惑星、計都・羅訖に配当された天文・暦の神である。これら天体の五惑星及び計都・羅訖は、天にあつて規則的な動きをしない星、つまり遊行する星と考えられていたため、八將神もまた遊行神であり、そうしたことから両者が同体であると考えられたのであろう。

この八將神のなかでも、よく知られているのが大將軍である。俗に「三年塞」といわれ恐れられていた遊行神であるが、暦注書には「大將軍は太白（金星）の精である」と一般的に言われている。ただし、この太白については、後述する金神とも同体であると考えられていて、ともすれば、大將軍＝太白＝金神という見方があったようである。

これについて、金井氏は、実際には太白星が暦注に示されている大將軍や金神とは、同じ遊行（移動）はせず、さらに大將軍と金神も別々の遊行神としてあることから、少なくともこれらは厳密には別物とされている。<sup>(19)</sup>

この八將神であるが、『簠簋内伝』では牛頭天王の王子たちで「春夏秋冬四土用行疫神也」という。ここで重要なのは明確に八將神が「行疫神」であると記されている点である。これは冒頭の縁起中に、末代の衆生たちに行疫神となつた牛頭天王とその眷属である八王子たちが「寒熱二病」を流行らせるとあることを受けているのだらう。ここで、少なくともこの八將神は「暦神」でありながら「疫神」でもあるということが確認できる。

### 「天德神方」

「四、天德神方」の項には、月毎の方位が示され、その後に天德神についての注釈が記されている。

右天德神者、蘇民將來之方也。或曰武塔天神。宜向此方可避病。乘舟吉、剛猛造舍出行吉。此神者、廣遠國主、牛頭天王大檀那也。八萬四千行疫神流行、不犯此方、大吉方可識也。

ここで目を引くのは、天德神が蘇民將來と結び付けられ、またの名を「武塔天神」といい、「牛頭天王大檀那」であるとしていふことと、この方角が病を避ける方角であり、八万四千の行疫神が疫病を流行らせても、この方角を犯すことはないとしているところである。

まず、ここに出てくる「武塔天神」であるが、『簠簋内伝』以外の

牛頭天王縁起をみてみると、牛頭天王と同体であるか、またはその父親であるとするものが多い。

『備後国風土記逸文』『疫隅国社』の条（『釈日本紀』巻第七所収）には、「北海坐志武塔神、南海神之女子乎呼波比尔坐尔、日暮。彼所、蘇民将来二人在伎。」

と武塔神と蘇民将来が別々の存在となっており、『神道集』『祇園大明神事』にも「牛頭天王武塔天神王等部類神也、天形星武塔天神牛頭天王崇」と記されており、牛頭天王と武塔天神となっている。少なくとも蘇民将来と武塔天神という説は、ポピュラーなものではなかった様である。

この暦注部分で重要なのは、天徳神の方位が病を避ける方位であるとしているところである。平安時代の具注暦である『永久三年暦』に「天徳在壬。壬上取土及立遊轉」とあることから、『簠簋内伝』以前から、天徳神の方位が病を避ける方位とされていたことがわかる。

一方、蘇民将来については、縁起中に牛頭天王が「曰汝子孫、不可妨礙」と蘇民将来の子孫と名乗れば、災厄から守護することを誓約している。蘇民将来の子孫と名乗れば疫病を防ぐことができるということとは、茅の輪の風習と共に牛頭天王信仰の象徴的な要素である。

このように天徳神と蘇民将来には疫病を避けるという共通の要素があったわけである。つまり、この暦注部分において、天徳神と蘇民将来が同体とされていることは、暦注の世界と牛頭天王信仰との世界とが『簠簋内伝』によって結び付けられたことを示している。

### 「金神七殺方」

次に「五、金神七殺方」の項である。この金神に関する記述は六、七、八、九の四項目に渡っている。ただ、六以下の項目に関しては、遊行する金神の方位に記しているのみである。

「五、金神七殺方」の項には、年毎の金神の方位を示した後、次のような注釈がなされている。

右此金神者、巨旦大王精魂也。七魂遊行而殺戮南閭浮提之諸衆生。若人向此方、則家内七人死。若無家内其數、則隣家人加之者耶。之名風災。金収肺、具七魂、断破萬物。故尤可厭者也。

この金神の方位の禁忌を犯すと、家内に七人の死人が出るという「金神七殺」という説については、『簠簋内伝』以外の暦注書にも記載されている。<sup>(21)</sup>

ただ、ここで問題となるのは、この『簠簋内伝』では、金神が巨旦大王の精魂であるとしてのことである。そこで金神と巨旦大王がどういった経緯で結び付けられているのかを考えていきたい。

金神と巨旦大王との関係について、三浦俊介氏<sup>(22)</sup>が次のように述べている。

『簠簋』において、金神に比定されているのは「巨旦大王」である。七・八項には「金神遊行」の文字が見えるが、説話において巨旦は遊行しない。本来別々の存在であった行疫神「金神」と蘇民将来の兄とを『簠簋』編者が強引に結び付けたことの表れである。

確かに、巨旦大王は縁起のなかでは遊行はせず、自らの邸宅から一歩も出ていない。ただ、暦注部分においては、金神は「巨旦大王精魂」となっている。

この金神は三浦氏が主張する縁起中の巨旦大王そのものではなく、身体を失った巨旦大王の精魂（タマシイ）なのである。

ではなぜ、金神と結び付けられた巨旦大王が実体のない「精魂」という存在なのかといえば、それは縁起中に牛頭天王によって滅ぼされ、その屍体までも解体されてしまっていることに由来する。つまり、この「巨旦大王精魂」とは、牛頭天王とその眷属によって滅ぼされた巨旦大王の成れの果てなのである。

故に、三浦氏の言うような金神と巨旦大王の遊行の記述の有無が、両者を強引に結びつけたことにはならないと思われる。

このように、巻一の暦注部分に記される暦神たちは、牛頭天王以下、冒頭の縁起に登場する神格・人物と結び付けられていることがわかる。それらに共通する要素として挙げられるのが、疫神という性格をそれぞれ保有しているということである。つまり、巻一の暦注部分は、如何にして疫病の難を避けるか、ということがテーマになっているのである。

ここから窺えることは、『簠簋内伝』巻一の牛頭天王縁起は、その暦注部分の説の典拠とされており、祇園社における牛頭天王の「疫神」という神格が、天道神の「暦神」という神格と習合していることの由来を語っているということである。宮廷の賀茂・安倍家の暦注書における典拠の役割を、『簠簋内伝』は冒頭の牛頭天王縁起に求めている

のである。

では次に、暦注部分の典拠としての役割を持つ『簠簋内伝』巻一の牛頭天王縁起の内容に移り、疫神と暦神という二つの神格を有する牛頭天王の姿が、どのように語られているのかをみていきたい。

### 三、「太山府君王法」と泰山府君祭

ここまでは、主に『簠簋内伝』の暦注部分を中心に考察を進めてきたが、そこからは「疫神」と「暦神」という二つの神格が習合していることが確認でき、さらにその典拠が冒頭の牛頭天王縁起に求められていることが窺えた。

では、暦注部分の典拠となっている『簠簋内伝』巻一の牛頭天王縁起の抱える宗教世界はどのようなものであったのだろうか。

これまでの牛頭天王縁起に関する先行研究を見ると、「祇園社の祭神である牛頭天王」への信仰を説く目的でこの縁起が成立したというのが一般的である。<sup>(23)</sup>この『簠簋内伝』の牛頭天王縁起もまたそのように位置づけられ、この疫神語りを主題とする牛頭天王縁起のヴァリエーションの一つとして見られてきたのである。<sup>(24)</sup>

その結果として「牛頭天王縁起に目が奪われすぎ、暦注部分への関心は不足していたと思われる」という冒頭に示した林氏の指摘する状況に到っているのである。

少なくとも、『簠簋内伝』が暦注書として編纂されているにもかかわらず、これまでの先行研究において暦注部分に関心が不足していた



事は、『簠簋内伝』の牛頭天王縁起が有する特色を見出し得なかつた要因の一つといえるだろう。故に『簠簋内伝』の縁起が有する特色もまた、「陰陽道の潤飾」<sup>(25)</sup>として片付けられてきたといえよう。

ともかくも、この『簠簋内伝』の牛頭天王縁起が、その暦注部分の典拠として編纂されている事を考えれば、單純に祇園社への信仰を説いているわけではないという認識を持つ必要があるだろう。祇園社の祭神である牛頭天王について語っているのではなく、天道神と習合した「曆神」としての牛頭天王についてこの縁起は語っているのである。そうした前提に立つて『簠簋内伝』巻一の縁起を読み解いていく。特にここでは巨旦大王が牛頭天王の報復を防ぐために修した「太山府君王法」という修法にスポットを当て、それが、この縁起の中でどのような意味を持っているのか明らかにしていきたい。

修法の内容に入る前に、牛頭天王による巨旦大王への報復に至る経緯を簡単に述べてみる。

北天竺の王舎城の大王である牛頭天王が天帝の使者としてきた瑠璃鳥の告げにより、南海の竜宮城にいる頗梨采女を娶りに行く途中、鬼の王である巨旦大王に宿を借りようとしたが、冷たく追い返されてしまう。そのとき、巨旦大王に仕えていた一賤女に蘇民将来のことを教えてもらう。蘇民将来に厚くもてなされ、蘇民将来から奉られた「隼鶴」という船によって頗梨采女のもとにたどり着き、夫婦の契りを交わし、八王子を儲けた。そして牛頭天王は北天竺へ帰ることを決意し、その途中に巨旦大王の一族を滅

ぼす事を八王子に告げる。

そうするうちに、巨旦大王の身に怪異が起こるようになり、不安になった巨旦は博士に命じて占いをさせると、昔、追い返した牛頭天王が八王子や眷属たちを引き連れて報復に来るといふ凶兆の表れであるとする。

そこで巨旦大王は「どのような祭祀をすれば、その難を逃れる事ができるのか」と問うと、博士は「千人の僧侶を供養するように」と答え、巨旦大王が「如何なる修法を行えばよいのか」と問うと、博士は「太山府君王法」を修すれば、宜しく牛頭天王の災難を退散できる」と答え、巨旦大王は言われたとおりに「太山府君王法」を修するのである。

この巨旦大王の修した「太山府君王法」は、絶大な威力を発揮し牛頭天王の神力をもつてしても攻めがたく思われたが、陀羅尼を誦する僧の中に居眠りをしているものがいた。そこに大穴が生じており、牛頭天王とその眷属はそこから侵入し、蘇民将来のことを教えた一賤女を除いて、巨旦大王の一族を殲滅してしまう。

ここで牛頭天王の災厄から逃れるために巨旦大王が修した「太山府君王法」について詳しくみてみたい。

この『簠簋内伝』の縁起に登場する「太山府君王法」という修法については、これまでほとんど触れられる事が無かった。村山修一氏が『簠簋内伝』の詳細な解説を『日本陰陽道史総説』のなかでされているが、牛頭天王縁起に関する部分の一文を引用してみると、

従つてこの由来譚には本書が撰せられた当時、すでに実習されていた様々の牛頭信仰の習俗が説かれていると同時に、その文章自体牛頭天王に捧げる祭文でもあったのである。実習された部分を念のために挙げてみると（中略）千人の僧を供養した大陀羅尼真言を唱し、泰山府君祭を修することなどがあろう。

村山氏によれば、『簠簋内伝』の縁起に記された「泰山府君王法」は、陰陽道宗家である安倍家が得意とした「泰山府君祭」のことであるという。

しかしながら『簠簋内伝』に記された「泰山府君王法」の様子を見ると、陰陽道祭である「泰山府君祭」と同一視することはできないように思われる。

この「泰山府君王法」の様子を縁起本文から抜き出してみると、

天張鐵網、地敷磐石、四方構長鐵築地、同外堅大澤溝堰、内造玉寶殿、同萍清淨牀。嬉慢歌舞八句大衆安座四維、鉤索鐃鈴四衆薩埵侍立四方。同寶高座上掛羅綾打敷、並天蓋瓔珞幢幡華幔、飄覆四維風邪、中有清淨明僧、唱滿諸大陀羅尼。

とある。巨旦大王が博士に勧められて行わせた「泰山府君王法」の修法がどのように行われたかがよくわかる。「天張鐵網、地敷磐石、四方構長鐵築地、同外堅大澤溝堰、内造玉寶殿、同萍清淨牀。」とあるように、密教の修法を行う壇と宝殿を設けている。さらに「嬉慢歌舞八句大衆安座四維、鉤索鐃鈴四衆薩埵侍立四方。」と金剛界の八供養菩薩や四摂菩薩を四維・四方に配置している。そして「同寶高座上掛羅綾打敷」と僧達の宝の高座に羅綾を敷いて、諸々の大陀羅尼を唱え

るとある。

ここにある内容を見ると、どうも陰陽道の祭祀というより、密教の修法のように見える。

一方、村山氏が挙げている「泰山府君祭」であるが、こちらは陰陽師によつて行われる陰陽道祭であり、その内容については祭祀執行の際に読まれる都状（祭文）などから窺い知ることができる。その都状は草案段階のものも含めて幾つか残っているが、現在のところ『朝野群載』所収の後冷泉天皇の為に行われた泰山府君祭の都状が最も古いものといわれている。

その都状をみると、まず冥道諸神十二座に対して、銀錢二百四十貫文、白絹一百二十匹、鞍馬十二匹、勇奴三十六人を献上し、泰山府君以下の冥府の諸神に、災厄を払い長寿を保つことを保つことを祈願する内容が記されている。

このように、泰山府君祭は祭主の延命長寿の為に、陰陽師たちによつて執り行われた。冥府の王である泰山府君の側近である司命・司禄が、人々の寿命が記された戸籍を管理し、その年齢に達した者を冥府に召喚する役割を担っていることから、泰山府君をはじめとする冥道の諸神に対して、その戸籍に記載されている寿命の年齢を延ばしてくれるように祈願するものである。

この泰山府君祭は、安倍晴明が活躍した十世紀後半から貴族層を中心に流行した。この祭祀は、平安貴族だけではなく、鎌倉幕府の武家政権においても取り入れられ、「百日泰山府君祭」「天曹地府祭」など大規模なものも行なわれるようになる。<sup>(26)</sup>

『篋篋内伝』の成立が南北朝期前後とすると、その年代に近い泰山府君祭の都状としては草案段階のものではあるが、足利義満が行わせたときのものが残っている。<sup>(27)</sup> 先の後冷泉天皇の都状と同じく、泰山府君をはじめとする冥道諸神十二座に、金幣、銀幣、銀錢、白絹、鞍馬、勇奴が献上されている。そして、天文の変異、地震、兵革、疾疫などの災害を鎮めてくれるよう、泰山府君及び冥道諸神に請い、更なる繁栄と長寿を祈願している。

ここで比較した「泰山府君王法」と「泰山府君祭」の相違が最も顕著なのは、前者が戒壇を設けて千人の僧侶に大陀羅尼を唱えさせているのに対して、後者は都状(祭文)を読んでいる、というところである。そもそも陰陽道の祭祀に僧侶が関わることは自体が実際にはなく、このことからこの両者はまったく別のものであるといえよう。

ただし、陰陽道祭としての泰山府君祭が成立するにあたって、密教の影響を強く受けていたことが、長部和雄氏<sup>(28)</sup>、坂出祥伸氏<sup>(29)</sup>に指摘されている。

その指摘について見てみると、不空撰『焰羅王供行法次第』<sup>(30)</sup>に冥府の王である焰羅王の配下に大山府君、五道將軍王がおり、疫病や氣病などの一切の病悩の時にこの法を修すれば、大山府君が焰羅王に乞い、その祭主の名を死籍から削って生籍に加えてくれると記されている。そして「大山府君の呪」を唱えるという記述があり、その大山府君を勧請する道場の図が表されている。

その『焰羅王供行法次第』の一文を引用してみると、  
是法疫病氣病一切病悩時、宜修兼修之。正報盡付死籍。能乞王削

死籍付生籍。到疫病之家。多誦大山府君呪。  
とこの修法の説明が記されており、「大山府君」の存在が強調されているようにも思われる。

長部氏は、この修法が「大山府君をして焰羅王に乞わしめるための修法」であるとしており、坂出氏もこの密教の修法が、安倍家の手によって陰陽道祭である泰山府君祭へと展開していったという可能性を指摘している。

この『焰羅王供行法次第』では、その中心はあくまで焰羅王であり、泰(大)山府君は祭主と焰羅王とのいわば仲介役として登場している。ただ、死籍を削り生籍に加えるという記述は、陰陽道祭の泰山府君祭と同じ形式であり、息災延命という修法の目的も泰山府君祭と同じといえる。<sup>(31)</sup>

また、小坂眞二氏は十世紀後半段階の陰陽道祭の展開について、「泰山府君祭の系譜に端的にみられる密教修法あるいは仏書の影響」があると指摘している。<sup>(32)</sup>

このように、泰山府君祭はもともと密教の「閻魔天供」といった冥府の修法の影響を受けて成立しているのである。陰陽道にあつては泰山府君が、密教にあつては閻魔天が冥府の主権者として位置づけられていたのである。

となれば、『篋篋内伝』における「泰山府君王法」は、密教の修法の形態を備えていながらも、閻魔天ではなく泰山府君を本尊としていることは、その冥府の世界観が陰陽道のそれに基づいていることを物語っているといえよう。

## 四、「太山府君王法」と『簠簋内伝』の宗教世界

さて、ここまで「太山府君王法」と泰山府君祭という修法についてみてきたが、ここで問題としたいのは、この泰山府君を祭る修法が牛頭天王とその眷属に破られてしまうことの意味である。

この泰山府君という神格は、「陰陽道宗家」である安倍家にとって、最も重要な神格であり、安倍家の邸宅には泰山府君を祀っており、泰山府君祭を行う祭場もあったといわれている。いわば泰山府君祭は陰陽道における最高神ともいえる存在として位置づけられていたといえよう。特に泰山府君祭は安倍晴明が得意としていたものであり、そのことは日記・説話資料などにも記され、一般的に広く知られていたといえる。

しかし、『簠簋内伝』は「安倍清明」に仮託されているながら、その泰山府君を祀る修法が破られているのである。先に述べたとおり、ここで登場する「太山府君王法」は晴明が得意としたという泰山府君祭とは違うものであるといっても、その陰陽道における最高神ともいえる泰山府君の修法が、牛頭天王とその眷属の前には通じなかったという結果からは、陰陽道書である本書の特異な性格が考えられる。言い換えれば、賀茂・安倍家の流れにはない『簠簋内伝』の固有性が表われているのである。

では、この牛頭天王による巨旦調伏の場面と「太山府君王法」について、これまでどのように考えられてきたのか。

今堀太逸氏によると、「太山府君王法」を、陰陽道の祭祀や密教の

修法という従来の疫病対策と捉え、縁起の後半部分に示される巨旦調伏の儀式や、年中行事などといった牛頭天王信仰に基づくものが、それに替わる新たな疫病対策としてあることを語っているのだという。<sup>(34)</sup>

この指摘にあるように、当時祇園社を中心としていた牛頭天王信仰の広がりの中に、この『簠簋内伝』もまた位置づけられている、というのがこれまでの一般的な見方であったといえよう。だからこそ、『簠簋内伝』の研究史を振り返っても牛頭天王信仰との絡みで論じられてきたのである。

しかし、そうした視点から『簠簋内伝』の牛頭天王縁起を論じても、そこから導き出されるのは、当時の祇園社を中心とした疫病対策としての牛頭天王信仰の「一般的な」かたちであって、必ずしも『簠簋内伝』の縁起が持つ独自の要素を見出すことにはならないのである。

その独自の要素を導き出すには、『簠簋内伝』の縁起の目的が、単に祇園社の祭神である牛頭天王への信仰を説いているのではなく、暦注部分の典拠とすることにある以上、暦注部分の説と結び付けて考える必要があるだろう。

その点を踏まえて論を進めるが、まず、巻一の暦注部分において天道神以下の「暦神」たちが牛頭天王以下の「疫神」と結び付けられている。つまり、この暦注部分においては、如何にして疫病の難を防ぐか、ということが主題となっているのである。

となれば、この「太山府君王法」が牛頭天王によって破られてしまうことの意味は、まず、この修法では牛頭天王とその眷属によって引き起こされる疫病などの災難を防ぐことはできないということであ

る。それはなぜかといえ、これは疫神でありながら暦神でもある牛頭天王の災厄というものが、暦の禁忌に基づくものでなければ防ぎ得ないのだ、ということこそ『簠簋内伝』の縁起は主張しているのではないだろうか。

今堀氏などが指摘する従来のものに替わる新たな疫病祭祀とは、『簠簋内伝』に挙げられているものをみても、「五節祭禮」をはじめ、六月一日の歯固めの儀式など、みな年中行事に結び付けられている。一方で、牛頭天王信仰を語るに欠かせない茅輪の風習については何ら記述がないのである。

「五節祭禮」とは、牛頭天王によって巨旦大王の死骸を五つに解体してそれぞれ五節句に配当して行われた巨旦調伏の儀式であると『簠簋内伝』では記している。それはすなわち、一月一日の紅白の鏡餅は巨旦の骨肉、三月三日の蓬の草餅は巨旦の皮膚、五月五日の菖蒲の粽は巨旦の髭と髪、七月七日の素麺は巨旦の筋、九月九日の黄菊の酒は巨旦の血脈であるという。

この牛頭天王が蘇民将来に託宣した疫病除けの儀式は、当時行われていた年中行事と結び付けられており、その年中行事は暦の禁忌に基づいているといえ、『陰陽雜書』<sup>(35)</sup>「第二十四、節日由緒」のなかで、五節句の由来が語られていることから窺える。

このことは、『簠簋内伝』の縁起における牛頭天王が、疫神という神格に加え、暦神としての神格もまたあわせ持っているということを表していると考えられるのである。

さらに『簠簋内伝』には、牛頭天王が竜宮界より閻浮提に帰還した

のが、長保元年六月一日としており、続けて、「於祇園精舍、三十日間、調伏巨旦、至于今世、學此威儀。」と祇園精舎において三十日間を渡り巨旦調伏の儀式を行い、それが今の世まで続いているという。

この長保元年という年は、本書の編者として仮託されている安倍晴明が実際に活躍していた時期である。つまり、『簠簋内伝』の世界では、この巨旦調伏の儀式は、安倍晴明によって行われたのが始めである、ということになっているようである。

このことは、「太山府君王法」の修法が、密教的な色彩のつよいものであり、また祇園社との結びつきが強い牛頭天王の縁起という内容でありながらも、本書が「安倍晴明」という陰陽道の祖ともいべき人物の手による陰陽道の書であることを主張しようとしていると思われる。

「太山府君王法」に関して、縁起中には暦との関係を窺わせる記述は一切なく、「太山府君王法」と牛頭天王が示した「巨旦調伏儀式」の違いは、暦に基づくものであるか否か、という点にあるといえよう。

「太山府君王法」が牛頭天王によって破られしまったということ、すなわち、この修法が牛頭天王の力を防ぐことができなかったということは、暦に基づく儀礼でなければ、暦神でもある牛頭天王の力を制御することができないということを意味していると思われるのである。

『簠簋内伝』の牛頭天王縁起が、暦注部分の典拠であるということ、まさに具体的に示されているのである。

## まとめ

ここまで『簠簋内伝』巻一の暦注部分の記述との関連から、牛頭天王縁起の巨旦調伏の場面、すなわち「太山府君王法」の修法にスポットを当てて考察してきた。

まず、『簠簋内伝』の暦注部分の記述と、賀茂・安倍家に伝わる暦注書の説との比較から、本書が賀茂・安倍家の暦注書としての系譜の中にありながらも、その流布主体が民間にあったことを踏まえ、宮廷の側の暦注書と、近世以降の民間の側の暦注書との橋渡しの役割を持っていたと考えられる。

そして巻一の暦注部分から、牛頭天王以下の疫神と、天道神以下の暦神とが習合していることと、冒頭の牛頭天王縁起がその暦注部分の典拠となっていることが改めて確認された。

その『簠簋内伝』の牛頭天王縁起中に登場する牛頭天王もまた、暦神としての神格を持ち、故に暦の禁忌に基づかない「太山府君王法」の修法が牛頭天王の災厄を防ぎ得なかったことを指摘した。

これらのことを踏まえて、『簠簋内伝』巻一の縁起に内包される宗教世界についてまとめてみたい。

そもそも牛頭天王は、祇園社を中心とした疫神信仰のなかに位置づけられる神格であった。

しかし『簠簋内伝』の縁起には、そうした祇園社の祭神としての牛頭天王像には見られなかった、暦神としての牛頭天王の姿があらわされており、それは、祇園社の祭神の由来を語るために、『簠簋内伝』

に牛頭天王縁起が収録されているのではないということである。

『簠簋内伝』は、牛頭天王の疫神としての要素を、暦の世界に取り込むことで、暦神という新たな牛頭天王の神格を顕現させたのである。『簠簋内伝』の牛頭天王縁起の特色は、暦の禁忌を守ることによって疫病を防ぐという固有な牛頭天王信仰を創出するところにあったのである。

この『簠簋内伝』を編纂した（宗教者たちが）、このように固有の牛頭天王信仰を創り上げることができたのは、その根底に、暦にもとづく独自の宗教世界を有していたからである。すなわち、それは暦の禁忌を守ることによって災いを防ぐという、「暦の宗教世界」であったのである。

そして『簠簋内伝』は、祇園社の祭神である牛頭天王を暦神とすることで、疫神という牛頭天王を取り込んだ新たな暦の宗教世界という、従来の安倍家や賀茂家の陰陽道とも異なる、新たな「陰陽道」を創り上げたのである。

## 〔注〕

- （１）本書の名称には、この他に『金鳥玉兎集』『簠簋』などがある。
- （２）西田長男「『祇園牛頭天王縁起』の成立」（『神社の歴史的研究』塙書房 1966年、後に柴田實編『御霊信仰』雄山閣出版 1984年）所収。
- （３）村山修一「日本陰陽道史総説」塙書房 1981年
- （４）中村八璋「日本陰陽道書の研究」第五章「簠簋内伝について」汲古書院

1985年

- (5) 他に先行研究として、井本進「簠簋内伝金鳥玉甕集成成立の研究」(『科学史研究』第十三号 1950年) 所収、神田茂「簠簋及びその類書について」(『科学史研究』第十三号 1950年) 所収、久保田収「祇園社と陰陽道」(『八坂神社の研究』臨川書店 1974年) 所収、松本隆信「中世における本地物の研究(六)」(『斯道文庫論集』第十八輯 1981年) 所収、村上学「『神道集』の世界」(『説話集の世界Ⅱ中世』(説話の講座5) 勉誠社 1993年) 所収、などがある。
- (6) 林淳「簠簋内伝」(日本仏教研究会『日本仏教の文獻ガイド』第二期第三巻 法蔵館 2001年) 所収
- (7) 平田篤胤全集刊行会編『平田篤胤全集』第二巻 名著出版 1976年所収
- (8) 注3西田前掲論文
- (9) 本稿では『簠簋内伝』の本文について注4中村前掲書に校訂されているものを用いる。『簠簋内伝』の活字化されているものは、『統群書類従』第三十一輯上(下出積與氏校注)『神道大系 陰陽道』(下出積與氏校注神道大系編纂会 1987年)があり、最新のものとしては、山下克明氏・真下美弥子氏校注(深沢徹編『日本古典偽書叢刊』第三巻現代思潮新社 2004年) 所収のものがある。
- (10) 注4中村前掲書 第三章「陰陽略書本文とその校訂」
- (11) 注10中村前掲論文
- (12) いずれも注4中村前掲書に所収
- (13) 下出積與氏は、『群書解題』第二十巻のなかで、「賀茂在方の『掌中暦』は本書によってできたものと考えられる」として、『簠簋内伝』の賀茂家との繋がりを指摘している。
- (14) 金井(現門田)徳子「金神の忌の発生」(『陰陽道叢書』古代 名著出版 1991年) 所収
- (15) 渡邊敏夫「日本の暦」雄山閣 1976年
- (16) 注15渡邊前掲書
- (17) 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』第二章「陰陽道の典拠」磐田書院 1996年
- (18) 「暦注諸神」という表現は、『陰陽略書』に「暦注諸神吉凶」とあることから、暦家の間では、既に定着していたと思われる。
- (19) 注14金井前掲論文
- (20) 『統群書類従』第三十一輯上、所収
- (21) 『陰陽略書』「金神七殺方」、『陰陽雜書』「第九 方角禁忌」の項にみえる。
- (22) 三浦俊介「陰陽思想——『簠簋内伝』をめぐる——」(福田見他編『宗教伝承の世界』三弥井書店 1998年) 所収
- (23) 注5久保田前掲論文
- (24) 牛頭天王縁起のバリエーションの一つとして、地方に伝わった牛頭天王祭文があり、先行研究としては、西田氏が幾つかの祭文を紹介しており(注2西田前掲論文)、山本ひろ子氏が奥三河の「牛頭天王島渡り祭文」について(山本ひろ子『異神』第四章「行疫神・牛頭天王」平凡社 1998年)、また斎藤英喜氏が高知県物部村に伝わるいざなぎ流の「天刑星の祭文」について(斎藤英喜『いざなぎ流 祭文と儀礼』断章1「病人祈禱」と「天刑星の祭文」法蔵館 2002年)、それぞれ論及している。
- (25) 注5村上前掲論文
- (26) 注3村山前掲書
- (27) 村山修一編『陰陽道基礎史料集成』東京美術 1987年
- (28) 長部和雄「唐代密教における閻羅王と泰山府君」(吉岡吉豊氏・M・スワミエ氏編『道教研究』第四冊辺境社 1968年) 所収
- (29) 坂出祥伸「日本文化の中の道教——泰山府君信仰を中心に——」(中村璋八

博士古希記念東洋学論集』汲古書院1996年) 所収

(30) 『大正新脩大藏經』二十一卷 374上

(31) 速水侑氏は、「泰山府君祭と焰魔天供・冥道供を分つものは、前者が陰陽師によって行なわれ、後者が密教験者によって修されたという点にある」とし、基本的に目的や祭文・都状の形式も共通していたとする。

(速水侑 『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館1975年)

(32) 小坂眞二「陰陽道の成立と展開」(『古代史研究の最前線』第四卷〔文化編〕下) 雄山閣 1987年) 所収

(33) 安倍晴明が泰山府君祭おこなった記録は、『小右記』永祚元年二月十一日条、『権記』長保四年十一月九日上にあり、また『権記』長保四年十一月二十八日条には、晴明の説によって、延年・益算の為に泰山府君へ供物を捧げたという記事がある。また『今昔物語集』卷十九第二十四にも、安倍晴明が泰山府君祭を行う話があり、『発心集』『宝物集』などを経て、その後「泣き不動縁起」へと展開していく。

(34) 今堀太逸『本地垂迹信仰と念仏』第2部「疫病と本地垂迹信仰の展開」法蔵館 1999年

(35) 『簞簀内伝』に挙げられている「五節祭禮」としている年中行事は、それぞれ邪気や疫気を祓う目的があった。(山中裕『平安朝の年中行事』塙選書 1972年)

(たにぐち かつのり 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)

(指導…斎藤 英喜 教授)

二〇〇四年十月十五日受理